

阿弥陀如来坐像

計り知れない光と生命の仏である阿弥陀如来の像は、鎌倉時代（1185～1333）に建てられ、国指定重要文化財に指定されています。檜でできたこの仏像（2.8m）は、両手で説法印を結ぶ阿弥陀如来を表現しています。光背（4.8m）には、13 体のその他の小さな仏が配されており、元々この仏像を飾っていた金箔が今なおわずかに残っています。作者の署名はありませんが、研究者は、この阿弥陀如来の像は鎌倉時代の有名な彫刻家である快慶の作品である可能性があると示唆しています。

これは、かつて長い間、神道と仏教を融合して信仰していた神仏習合の施設であった石清水八幡宮から残された、珍しい仏像の 1 つです。この仏像は元々、石清水八幡宮の境内にあった八角堂というお堂に祀られていました。1868 年に明治政府が神仏分離を命じたとき、石清水八幡宮から仏教にまつわる物をすべて取り除く必要がありました。八角堂と阿弥陀如来像を救うために、正法寺の元住職が 1870 年にそれらを正法寺の近くにある古墳の上に移しました。2008 年に、この像は、保護と保存のため法雲殿に移されました。